

これからの社会教育とは  
－栃木県社会教育会議で考える－

開倫塾  
塾長 林 明夫

**Q：栃木県社会教育会議とは何ですか。**

A：(林明夫：以下省略)栃木県教育長から委嘱された20名の栃木県社会教育委員(2年任期)の会議です。年に数回栃木県庁そばの栃木県公館で開催。栃木県教育長、次長をはじめ県の社会教育の実務責任者10数名とともに、栃木県の社会教育のあるべき姿について議論。現地視察や調査・研究会などを経て、2年に1回ずつ県教育長への提言書を取りまとめて提出しています。議論や活動は非常に熱心です。私は2004年より栃木県社会教育委員を務め、この8月で3期目に入りました。

**Q：他にどのような人が委員としておいでですか。**

A：県の高次校長会、中学校校長会、小学校校長会、大学、県PTA連合会、公民館連合会、地域婦人連合会、ボランティア団体、人権団体、国際交流協会、子育て支援団体、マスコミなど栃木県内の各種団体の代表と、これに加え、今期から2名の公募委員が御参加のようです。

**Q：なぜ林さんは、栃木県社会教育委員をお務めですか。**

A：栃木県の有力な経済団体である栃木県経営者協会から推薦され学識経験者として選任されたようです。いわば栃木県の経済界代表ですので、その自覚を持って参加させて頂いております。

**Q：これからの社会教育はどうあるべきですか。**

A：従来は、家庭教育や学校教育を補い、また、支援する役割が社会教育に期待されていたように思います。しかし、21世紀を迎えた現在、これからの社会教育には現代社会の課題の解決に真正面から取り組むことが求められていると考えます。

**Q：その課題とは何ですか。**

A：「知識社会」、「グローバル化社会」、「超長寿社会」この3つと私は考えます。

**Q：「知識社会」に対応する社会教育とは何ですか。**

A：①未修学者に対する補習教育(不足する基礎学力を補う教育)が最も大事と考えます。学校教育は一人の落ちこぼれもつくりたくない努力をする。社会教育は、学校は卒業しているけれども実際には基礎学力が身に付いていないすべての未修学者に対する教育を、徹底的に行うべきと考えます。基礎的な学力なしでは、「知識社会」でちゃんとした仕事(ディーセント・ワーク)に就くことや社会的活動をする、もっと言えば生活することも困難と考えるからです。

②また、高度専門職業人を目指す人達に対しての専門教育も、大学等の高等教育機関と連携を深めながら、社会教育として徹底的に行わなければ、知識社会は支えきれません。

③どのような仕事や社会的活動をするにも、コンピュータの知識は欠かせません。

**Q：「グローバル化する社会」に対応する社会教育とは何ですか。**

A：①日本に来る外国人に対する「生活日本語」、「仕事や社会活動の上での日本語」の他に、学校で授業や様々な教育を受けるのに必要な「学習日本語」、高校入試や大学入試などの入学試験を受けるのに必要な「入学試験受験日本語」、さらには介護士や看護師などの国家試験を受験するのに必要な「資格試験受験日本語」など様々な日本語教育を「グローバル化に対応する社会教育」として行う必要があります。

②日本人に対しては、学校教育で十分身に付かなかった英語をはじめとする仕事や活動に必要な外国語を身に付けることも、大切な社会教育です。

③多様な集団の中で交流する能力を身に付けるための異文化教育は、日本人だけでなく来日する外国人にも社会教育として欠かせません。

**Q：「超長寿社会」に対応する社会教育とは何ですか。**

A：①長寿は素晴らしいことではありますが、一人でも多くの方が「いつまでも若々しく生きる」ことで社会の負荷をできるだけ少なくすることを目指すべきと考えます。

②そのためには、どのようにしたら「いつまでも若々しく生きる」ことができるかの社会教育を、これから 65 歳を迎える人と既に 65 歳を迎えた人全員に、社会総がかりで行うべきです。高齢者の医療予算や介護予算のたとえ 1 % を使ってでも行う価値はあります。

③「よく生きる」ことが教育の目的であるなら、一人でも多くの方が「いつまでも若々しく生きる」ことで、持続可能な社会を目指すことが、現代日本の財政危機を救う最も有効な手段と考えるからです。

④障害を持つ人々に対する生涯に渡る社会教育は急を要します。障害者への教育費用の大半を学校教育で使うことから、障害者への生涯に渡る教育に予算配分を変えるべきと私は考えます。

**Q：学習塾、予備校、私立学校経営者の皆様にお考え頂きたいことはありますか。**

A：目の前にいる児童、生徒、学生の一名も落ちこぼさないことが第 1。図書館、美術館、博物館、公園、自然体験施設、体育館、公民館など既存の社会教育施設を十二分に活用して頂きたいことが第 2。「知識社会」、「グローバル化」、「超長寿化」に対応した持続可能な社会を目指す教育、つまり「持続教育(ESD:Education for Sustainable Development)」の本格的な担い手になって頂きたいことが第 3 です。

**Q：最後に一言どうぞ。**

A：今月も、私が最近読み、皆様もお読みになれば必ずわくわくして、ためになると思われる本を御紹介させていただきます。

①童門冬二著「義塾の原点－日本を変革させた明治維新の原点を探る－」(上)(下)リプロアルテ 2008 年 8 月 22 日刊。

②齋藤孝・梅田望夫著「私塾のすすめ－ここから創造が生まれる－」ちくま新書、2008 年 5 月 10 日刊。

③白井恭弘著「外国語学習の科学－第二言語修得論とは何か－」岩波新書、2008 年 9 月 19 日刊。  
4 冊とも、皆様の自らの原点を考え、将来を見つめる、また、実務の上でお役に立つと確信します。御参考まで。

－ 2008 年 9 月 23 日記－